

[研究論文]

社会性と情動の学習 (SEL) を関連付けた中学校における
英語コミュニケーション活動の効果

Effects of Social and Emotional Learning on English Communication Activities at Junior High School

阪井 彰一

Shoichi SAKAI

小泉 令三

Reizo KOIZUMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
教育実践力開発コース

福岡教育大学
教職実践講座

(2019年1月31日受理)

本実践研究の目的は、予防・開発的な生徒指導として行われた社会性と情動の学習の SEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School) プログラムを中学校の英語科の学習におけるコミュニケーション活動に関連付けることの効果を検討することであった。公立中学校1校の第2学年4学級を中学生用 SEL-8S 自己評定尺度の結果をもとに介入群と協力群とに分け、その両群に対して「自己紹介をしよう」という単元を英語科の学習に設けて3回の授業を実施した。介入群には1回目から3回目の全ての授業において SEL-8S プログラムで学習した社会的スキルを関連付けて英語コミュニケーション活動を実施し、協力群には3回目のみ行った。協力群との比較の結果、介入群は授業後の感想の文字数が3回目で増加していた。その内容を分析してみると、英語の学習に関する気づきが高まり、英語で相手とコミュニケーションを取ることへの関心が3回目の実践で上昇していた。また、生徒相互評価の結果、相手に英語で話す態度は3回目の実践で向上した。

キーワード：社会性と情動の学習，SEL-8S プログラム，英語コミュニケーション活動，関連付け

1 問題と目的

文部科学省は、2002年7月に『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を策定し、これに基づいて2003年3月に具体的な行動計画を策定した(文部科学省, 2003)。それ以来、中学校や高等学校の外国語科においてコミュニケーション能力を育成する必要性が叫ばれるようになった。また、2008年に改訂された小学校学習指導要領において、外国語に触れコミュニケーション能力の育成の素地をつくることを目的に、小学校の高学年に外国語活動が導入された。そのことで小学校から高等学校まで一貫した外国語教育を実施することにより、外国語を通じて言語や文化に対する理解を深め、積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力を身に

付けさせることを目標としてきた。様々な取組を通じて指導の充実が図られ、小学校での外国語活動の成果として、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成され、聞いたり話したりする活動を行うことに慣れているという変容が中学生に見られるようになった(文部科学省, 2017)。一方で課題として、文部科学省(2017)は、話したり書いたりする活動や、即興性を意識した言語活動が不十分であることなどを挙げており、また、学年が上がるにつれて学習意欲が低下していることも課題として問題視している。

2017年度に告知された学習指導要領(文部科学省, 2017)では、多様な他者と協働しながら新しい価値を発見していく力を生徒に身に付けさせるために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が取り上げられるようになった。特に英語教育においては、これまでの課題に鑑み、創造的思考や感性・情緒面からもコミュニケーション

ンの基盤を形成し、適切な反応を示すなど他者に配慮した双方向的なコミュニケーションの態度を育成することを重点目標としている。

コミュニケーション活動を授業の中心に据える英語教育には、他者との協同的な学習は必要不可欠である(江利川, 2012)。ところが、学校生活の中で、他者と関わる際に相手に対して言いたいことが言えずに我慢したり、相手を攻撃したりなど人間関係を築く上で課題をもっている生徒が増えてきていることが「平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によって報告されている(文部科学省, 2018)。小泉(2005a)は学習場面において、教師と子どもの関係、もしくは子ども同士の間人間関係が成立していなければ、学習効果の向上は期待できないと指摘している。そこで小泉・山田(2011)は、予防・開発的な生徒指導の視点から、社会性と情動の学習(Social and Emotional Learning, 以下 SEL)の導入の必要性を述べている。SEL とは、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性(対人関係)に関するスキル、態度、価値観を身に付ける学習」であり、SEL の特定のプログラムとして SEL-8S プログラムを提案している。これは、日本の実情に合わせて児童生徒の社会的能力の育成を目的とした心理教育である。

SEL を教科等と関連付けた先行研究として、田中・小泉(2007)は、小学校において SEL-8S プログラムを道徳、特別活動、帰りの会の時間と関連付けて2ヶ月間実施した。教師評定において SEL-8S プログラムで目指す社会的能力について児童の変容が認められたと報告している。香川・小泉(2014)は、小学校の低学年に8回、中学年以上に9回の SEL-8S プログラムを実施し、学習の定着との関係を検討した。その結果、2, 3, 5, 6年生の国語テスト、4年生の算数テスト、4, 6年生の漢字テストで有意な得点の上昇が認められたと報告している。

しかしながら、英語の学習場面において最も SEL が関係し得るコミュニケーション活動に SEL を関連付けることはほとんど検討されてきていない。コミュニケーション活動の際に、経験的にやり取りのルール(例:話すときのアイコンタクトや聞く態度)の必要性を感じ、それを提示する教師はいるが、小泉(2005b)が言うように、一部の教師だけが成し得る“名人芸”的教育である。先に述べた、英語科の重点目標である「創造的思考や感性・情緒面からもコミュニケーションの基盤の形成」や「適切な反応を示すなど他者に

配慮した双方向的なコミュニケーションの態度の育成」のために、SEL の関連付けは有効であると考える。

以上のことから、本研究の目的は、予防・開発的な生徒指導の取組として行った SEL-8S プログラムで学習した社会的能力を英語のコミュニケーション場面に関連付けることの効果を検討することである。その際、すべての時間で関連付けた介入群と、一部の時間でのみ関連付けた協力群を設定する。

2 方法

1. 実施期間

2017年12月～2018年1月。そのうち、授業したのは、1月17日～1月31日である。

2. 研究対象

福岡県内の A 中学校第 2 学年の 4 学級の生徒 150 名が参加し、病欠(インフルエンザ等)で欠損値のあるデータは除外した 92 名を分析対象とした。

A 中学校では、教育活動の一環として、全学年で SEL-8S プログラムが定期的実施されている。SEL-8S プログラムとは、5 つの基礎的社会的能力(自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定)と 3 つの応用的社会的能力(生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動)の育成を目指した心理教育である(小泉, 2011)。

3. 評価方法

(1)社会的能力

事前調査として、生徒の社会的能力を測るために、小泉・山田(2011)が開発した中学生用 SEL-8S 自己評定尺度を 2017 年 12 月に実施した。中学生用 SEL-8S 自己評定尺度は、中学生の 8 つの社会的能力(自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定、生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動)を評価する尺度である。虚偽尺度 2 項目を含む全 26 項目で、1 つの項目につき、1 から 4 点の 4 件法で回答する。各項目を合計して、社会的能力得点(24～96 点)とした。

(2)学習プリントによる生徒の記述

各回の授業で、生徒に授業の感想を書いてもら

い、感想文字数を算出した。さらに、それらの記述内容を「話すことへの気づき」「聞くことへの気づき」「英語の学習に関する気づき」「英語コミュニケーションへの関心」に分類した。分類の仕方は、例えば「相手の目を見て話すことで、相手が理解しているか確認しながら話すことができた」という記述があれば「話すことへの気づき」、「相手は相槌を打ちながら聞いてくれたので安心して話すことができた」という記述があれば「聞くことへの気づき」、「自己紹介では動名詞をたくさん使うことがあった」という記述があれば「英語学習に関する気づき」、そして「英語でコミュニケーションは楽しい」という記述があれば「英語コミュニケーションへの関心」の内容とみなし、それぞれの内容項目に関する記述があれば1点、なければ0点、複数あれば2点以上と数値化した(範囲: 0~3点)。3回目の実践終了後に分析した。

(3)生徒相互の評価

「聞く態度」や「話す態度」について、ペアで生徒同士が相互に4件法で評価をした。自己紹介している生徒は相手の聞き方を評価し、自己紹介を聞いている生徒は相手の話し方を評価した。授業では、生徒はペアを変えながら3度相手进行评估し、「聞く態度」と「話す態度」の合計得点をそれぞれ算出し、平均値(「聞く態度」の範囲、4~16点;「話す態度」の範囲、3~12点)を求めた(表1)。3回目の実践終了後に分析した。

4. 手続き

①群設定

4学級を SEL を関連付ける介入群と関連付けない協力群に分けた。2つの群に分ける際には、

社会的能力得点を基にして、両群間に得点の差が出ないように介入群2学級(41名;男子22名,女子19名; $M=74.34, SD=9.98$)と協力群2学級(51名;男子28名,女子23名; $M=74.99, SD=8.86$)とに分けた。

②実践授業について

「自己紹介をしよう」という単元を設定し、両群とも3時間構成で授業を行った。授業を行う際には、介入群には1回目から3回目の授業全てで、協力群には3回目の授業でのみ、これまで SEL-8S プログラムで学習した社会的スキルを関連付けた(図1)。関連付け方は、自己紹介のやり取りの活動を行う直前に、「話す態度のポイント」や「聞く態度のポイント」をポスターにしたものを示し、「相手に自分の意見を言うときには、相手に身体を向けて目を見ながら大きな声ではっきりと言う」「相手の話を聞くときには、体を相手に向けて目を見て頷いたり相槌をうったりしながら最後まで聞く」などのような説明を行った。なお、3回の授業の主眼と介入する SEL のポイントは、表2に示した通りである。1回目の授業では、自己紹介をすることに焦点を当て、話す態度のポイントを提示した。2回目の授業では、聞き手に照準を合わせ、相手に配慮した話の聞き方ができるように、聞く態度のポイントを提示した。3回目の授業

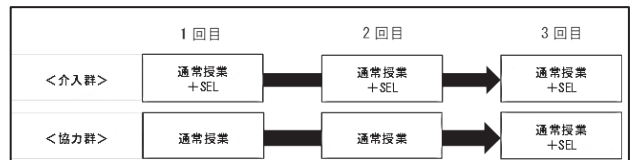


図1 英語の授業の手続き

表1 聞く態度と話す態度の評価の観点

項目	1点	2点	3点	4点
相手は相槌を打ちながら話を聞いていた。	聞いている間、相手からの相槌は全くなかった。	聞いている間、相手は1回相槌をうった。	聞いている間、相手は2回以上相槌をうった。	聞いている間、相手は2回以上複数の種類の相槌表現を使った。
相手は体を向けて話を聞いていた。	聞いている間、終始相手の体は自分とは違う方向を向いていた。	聞いている間、相手は顔だけ自分の方を向いていた。	聞いている間、相手は体を自分に向けていたが、途中で違う方向を向いた。	聞いている間、終始相手は体を自分の方に向けていた。
相手は自分の目を見ながら話を聞いていた。	聞いている間、終始相手とは目が合うことはなかった。	聞いている間、相手はときどき自分と目が合った。	聞いている間、相手は自分の目を見ていたが、途中で視線をそらした。	聞いている間、終始相手は自分の目を見ていた。
相手はうなずきながら話を聞いていた。	聞いている間、相手はうなずくことはなかった。	聞いている間、相手は1回うなずいた。	聞いている間、相手は2回以上うなずいた。	聞いている間、相手は適切に何度もうなずいた。
相手に聞こえる声で自己紹介をしていた。	耳を相手に近づけないと相手の声が聞こえなかった。	耳を相手に近づけると相手の声が聞こえた。	耳を相手に近づけるまでではないが、声が小さくて聞き取りづらい個所があった。	終始相手の声は顔を近づけなくても十分に聞こえていた。
相手に体を向けて自己紹介をしていた。	相手の体は自分とは違う方向を向いて話していた。	相手の体は自分とは違う方向を向いていたが、顔は自分に向けて話していた。	相手は体を自分に向けていたが、途中で違う方向を向いて話していた。	終始、相手の体は自分の方を向いて話していた。
相手の目を見て自己紹介をしていた。	相手は終始自分の目を見ずに話していた。	相手はあまり自分の目を見ないで話していた。	相手は自分の目を見て話していたが、ときどき話しながら視線がそれた。	相手は終始自分の目を見ながら話していた。

表2 実践した授業の内容

1 回目	<p>【主眼】 既習の文法事項を使って、まとまりのある自己紹介の英文を書き、級友に自己紹介をすることができる。</p> <p>【SELのポイント】(介入群のみ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話す態度のポイント
2 回目	<p>【主眼】 まとまりのある自己紹介の英文を相槌を打ったり、うなずいたりしながら聞き取ることができる。</p> <p>【SELのポイント】(介入群のみ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞く態度のポイント
3 回目	<p>【主眼】 まとまりのある自己紹介の英文を聞いて、その内容について相手に質問することができる。</p> <p>【SELのポイント】(介入群と協力群)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話す態度ポイント ・聞く態度ポイント

では、即興性を重視し、適切な反応を示しながらやり取りができるように、話す態度のポイントと聞く態度ポイントの両方を示した。

3回それぞれの授業後に、生徒はその日の学習の感想を学習プリントに記入した。

4 結果

1. 学習プリントによる生徒の記述から

感想の文字数について実施(介入群, 協力群)×時期(1回目, 2回目, 3回目)の2要因分散分析を行った(表3)。分析には, HAD(清水, 2016)を用いた。その結果, 交互作用が有意であったため, 下位検定(Holm法, $p<.05$, 以下同じ)を行ったところ, 介入群の3回目の文字数が1回

目と2回目より多くなっていた。また3回目には介入群の文字数は協力群よりも多かった(図2)。記述内容に関する4つの分類のそれぞれについて, 実施(介入群, 協力群)×時期(1回目, 2回目, 3回目)で2要因分散分析を行った。

「英語の学習に関する気づき」について実施(介入群, 協力群)×時期(1回目, 2回目, 3回目)の2要因分散分析を行った。その結果, 交互作用に有意な傾向が見られたため, 下位検定($p<.10$)を行ったところ, 3回目の介入群の得点が1回目と2回目よりも高くなる傾向にあった。また3回目には介入群の得点は協力群よりも高い傾向にあった(図3)。

「英語コミュニケーションへの関心」についても交互作用が有意であったため, 下位検定を行ったところ, 3回目の介入群の得点が1回目と2回目よりも高くなっていた。また3回目には介入群の得点は協力群よりも高かった(図4)。

2. 生徒相互の評価から

「聞く態度」と「話す態度」について実施(介入群, 協力群)×時期(1回目, 2回目, 3回目)の2要因分散分析を行った(表4)。その結果, 「話す態度」にのみ交互作用に有意な傾向が見られたため, 下位検定($p<.10$)を行ったところ, 3回目の介入群の得点は1回目と2回目よりも向上していた。また3回目には介入群の得点は協力群よりも高かった(図5)。

なお, 介入群と協力群のどちらも, その後は従来と同じような授業を受け, 学期末試験・評価では両群の間に有意な差が見られなかった。

5 考察

本研究の目的は, 予防・開発的な生徒指導の取組として行ったSEL-8Sプログラムで学習した社会的スキルを英語のコミュニケーション場面に関

表3 感想文字数, 話すことに関する気づき, 聞くことに関する気づき, 英語の学習に関する気づき, 英語コミュニケーションへの関心の平均値とSD, 分散分析結果

	介入群			協力群			分散分析結果		
	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	主効果(実施) df=1/90	主効果(時期) df=2/180	交互作用 df=2/180
感想文字数	22.54 (14.73)	21.56 (8.28)	50.71 (29.03)	24.69 (11.83)	26.22 (9.89)	37.57 (14.93)	0.83	64.79 **	10.84 **
話すことに関する気づき	0.29 (0.46)	0.27 (0.45)	0.56 (0.63)	0.41 (0.64)	0.43 (0.54)	0.43 (0.50)	0.50	2.37 +	2.10
聞くことに関する気づき	0.20 (0.40)	0.22 (0.42)	0.34 (0.48)	0.33 (0.48)	0.29 (0.46)	0.35 (0.48)	2.04	1.05	0.42
英語の学習に関する気づき	0.34 (0.48)	0.78 (0.47)	1.22 (0.85)	0.41 (0.54)	0.71 (0.46)	0.94 (0.68)	1.20	40.80 **	2.53 +
英語コミュニケーションへの関心	0.05 (0.22)	0.15 (0.36)	0.49 (0.51)	0.08 (0.27)	0.08 (0.27)	0.16 (0.37)	7.78 **	15.92 **	7.32 **

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.005$

表4 聞く態度と話す態度の平均値とSD, 分散分析結果

	介入群			協力群			分散分析結果		
	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	主効果(実施) df=1/90	主効果(時期) df=2/180	交互作用 df=2/180
聞く態度	15.33 (1.03)	15.31 (1.45)	15.43 (0.87)	14.52 (1.37)	14.82 (1.13)	15.05 (1.27)	8.90 **	2.38	1.12
話す態度	11.44 (0.92)	11.37 (1.29)	11.76 (0.48)	11.37 (0.65)	11.42 (0.80)	11.17 (1.77)	1.82	0.12	2.63 +

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.005$

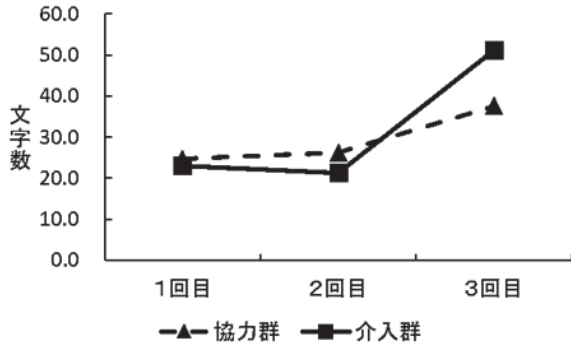


図2 感想文字数の推移

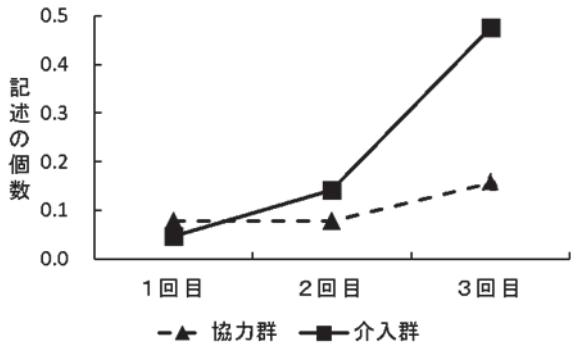


図4 英語コミュニケーションへの関心の推移

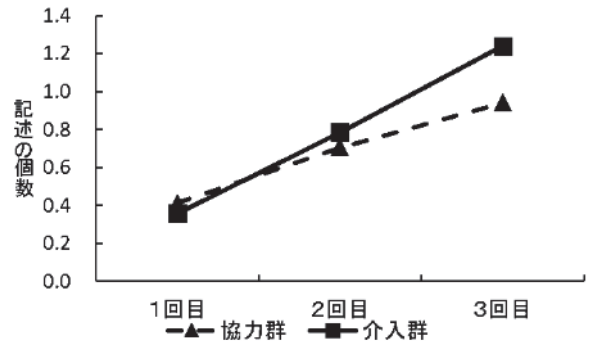


図3 英語の学習に関する気づきの推移

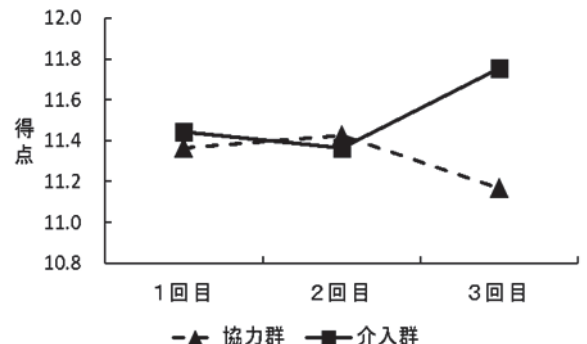


図5 話す態度の推移

連付けることの効果を検討することであった。その結果、英語の学習に関する気づきや英語コミュニケーションへの関心を高めたり、相手に英語を話す態度を向上させたりする可能性があることが明らかになった。

まず、英語の学習に関する気づきについては、近年の外国語教育では、**Consciousness Raising** や **Language Awareness** という概念が取り上げられるようになり、学習者の言語形式に対する「気づき」が言語の習得を促すという点で重要視されている(福田, 1999)。つまり、英語の授業を行っていく上で、生徒の「気づき」を促す手立てが必要であり、教師は英語の学習の場面でこの「気づき」を促すためのコミュニケーション活動を授業の中で仕組んでいくことが必要である。本実践においては、SELを英語のコミュニケーション活動に関連付けることで、生徒の「気づき」を促進することができることが示唆された。

そして、英語コミュニケーションへの関心はSELを英語のコミュニケーション場面に関連付けることで高まることが示唆された。Watzlawick (1967) が「*One cannot not communicate.*」と言うように、もともと人は人とかかわることに関心が高い。SELを英語のコミュニケーション活動に関連付けることによって、コミュニケーション

を通して多くの生徒と関わりたいという生徒の欲求(末田・福田, 2017)を満たすことができ、英語でのコミュニケーションの意欲を高められることが期待される。

さらに、鶴田ら(2014)は、視線や相槌について英語人に比べて日本人は話をしている最中に相手を見るのが少ないことを指摘している。本実践において、授業ではSELを英語のコミュニケーション活動に関連付けて生徒に相手の話を聞く態度や相手に話す態度について意識させた。鶴田ら(2014)の言う好ましいコミュニケーションの態度において、SELを英語のコミュニケーション活動に関連付けることで、コミュニケーションの場面で相手に英語で話す態度を向上させることができる可能性が示唆された。このことから、文部科学省(2017)が英語教育の重点目標として挙げている、創造的思考や感性・情緒面からもコミュニケーションの基盤を形成し、適切な反応を示すなど他者に配慮した双方向的なコミュニケーションの態度を育成することに対して、SELを英語のコミュニケーション活動に関連付けることは部分的に一助となりうる。

最後に、本実践において、相手の話を聞く態度を向上させることができなかった。他者に配慮した双方向のコミュニケーションを実現させるため

に、話を聞く態度を向上させる活動を仕組んでいくことが今後の実践の課題である。

主な引用・参考文献

- 江利川春雄 2012 協同学習を取り入れた英語授業のすすめ 大修館書店
- 福田浩子 1999 *Consciousness Raising と Language Awareness—その定義と言語教育における意義—* 青山国際コミュニケーション研究, 3, 5-20
- 香川尚代・小泉令三 2014 小学校での SEL-8S プログラム導入による社会的能力の向上と学習定着の効果 日本学校心理学会年報, 7, 97-109
- 小泉令三 (訳編) 2005a 教科学習および社会性と情動の学習 モーリス・J・ライアス (著) IAE, IBE, UNESCO 教育実践シリーズ 第 11 号 (2003) 福岡教育大学紀要, 54, 99-111
- 小泉令三 2005b 社会性と情動の学習 (SEL) の導入と展開に向けて 福岡教育大学紀要, 54, 113-121
- 小泉令三 2011 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 小泉令三・山田洋平 2011 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房
- 文部科学省 2003 英語が使える日本人の育成のための行動計画
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領解説外国語編 開隆堂出版
- 文部科学省 2018 平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について
- 清水裕士 2016 フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 教育実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73
- 末田清子・福田浩子 2017 コミュニケーション学 その展望と視点 松柏社
- 田中展史・小泉令三 2007 社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの強化・般化に関する試行的実験—教科等との関連付け, 目標の個別化, 保護者との連携を通して— 福岡教育大学心理教育相談研究, 11, 73-81
- 鶴田庸子・Rossiter, P., & Coulton T. 2014 英語のソーシャルスキル 大修館書店
- Watzlawick, P., Beavin, J. H., & Jackson, D. D. 1967 *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes.* New York, NY: W.W. Norton & Company, Inc.

謝辞

本研究をまとめるにあたり、機会を提供し、協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。